令 和 5 年 度

入学者選抜学力試験問題

後 期 日 程

国　　語

注　　意

1. 解答は別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 解答用紙の表紙を含むすべてのページの※印欄に、受験番号・氏名を記入すること。
   受験番号は、本学受験票の受験番号を記入すること。
   ※印欄以外の箇所には、受験番号・氏名を絶対に書かないこと。
3. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。
4. 総ページ数
   問題冊子―13 ページ
   (うち白紙―2 ページ)

I　つぎの文章について後の問に答えよ。

（さよは、夫婦の日常の中で、買ってきてほしかったものを何も言わないのに良人が買い物してきてくれるというような、言外の心の通じ合いに心を留め、お互いがどれだけ相手の心を見通すことができるのか、深くお互いの心の風景を跋渉してみようと考えた。）

保夫の側から見ると、さよは近頃特に濃やかに気の利く妻となって来た。

彼女は、一つでも、未だ口に出して云われない彼の希望や要求を察して、仕とげたのを発見すると、ひどく忻んだ。普通妻が、良人の満足を見て自分も好い心持になるという以上のものが、さよにはあった。彼女にとって、そのことが出来たのは——保夫が、

「ほう、あるね。実はもうそろそろ買って来なければいけないと思っていたんだが」と、新しいオー・ド・コローンの瓶を手にとるのを見るのは——つまり自分の感じが間違ってはいなかった証拠であった。さよはそこから二重の嬉しさを得たのである。

時によると、また、彼女は何か云い出そうとする保夫の口先を、

「あ、一寸待って。云わないで、云わないで」と、あわてて①遮ることがあった。夕飯後、彼等は定って八時頃まで雑談した。夕暮の気持よい日には縁側に並んで腰をかけたり、庭をぶらついたりしながら。——そういう時、話の続きを中絶させて、さよは熱心に、

「あ！　一寸待って」

を叫ぶのであった。保夫は、兵児帯の後に両手をさし込んだまま、訝しそうに彼女を顧みる。

「何故？」

「——その先は私が云うの」

さよは、良人の顔から眼を離さず説明した。

「私がね、貴方がきっとこうおっしゃるだろうと思うことを云うの。当ったか当らないか、正直に教えて頂戴」

そこで、さよはもったいぶり、場合によっては、

「――省――課書記官谷保夫は、今、彼の従弟の就職について云々」

と、冗談を混ぜて良人の考えや心持を話した。保夫は本気にならず、

「莫迦」

と苦笑しながらも、さよによって読みあげられる彼の考えというものに耳を貸した。さよは、妙に真剣で、頭の奥から糸でも繰り出すような眼付で話しながら、少しあやふやなところに来ると、

「そうじゃあなくって？　違って？　まるで違うこと？」

と念を押す。全然見当の脱れた時、保夫はさも面白そうに高笑いした。そして、A エンリョなく、

「莫迦」

を連発して彼女を揶揄した。さよは、B ヒタイの隅を掻いて敗亡を示した。当がはずれても、結局食後の②座興として決して不適当なものではない。然し、十中七八まで保夫は彼女の言葉を正面から否定はしなかった。その代り、はっきり承認もしない。彼は、にやにやしながら、

「まあそう思うならそうして置くさ」

と云うのであった。

この当て役が反対に保夫に振りつけられると、二人の会話は、さよがその役を持った時ほど快活に、熱をもっては進まなかった。

彼女は良人に注文するだろう。

「きのう吉村さんがいらしった時ね、私、あの方について感じたことがあるのです。何だとお思いになって？　鈴木さんと比較して――当てて頂戴」

保夫は、気も乗らなそうに煙草の烟(けむり)を吹いた。

「何の稽古が始るのかい。――吉村について感じたって……バクゼン[C]としすぎて問題になりゃあしないよ」[2]

さよは、良人に興味を持たせたく、一生懸命に云った。

「吉村さんと鈴木さんとは同じ実業家でしょう。実業家といっても二人は実業につく動機がまるで異(ちが)うと思ったの、そのこと――」

「厄介なことになったな」

保夫は間に合わせな答をした。

「第一、男の見た男と、女の見た男とは大分違うよ」

「いやな方！」

さよは、酸いような笑い[3]を笑った。

「違うからこそ当てて頂戴と申上るのよ。あの二人は性格が随分異っているでしょう、その違いを私がどう感じたかということなのよ」

「さあ――大体何だろう、鈴木は神経質で、考え出すと眠れないという方だが、吉村はずっと太っ腹だろうな。大損をしてハッハッハッと笑うのは、吉村でなけりゃあ出来ないゲイトウ[D]だろうな」

さよは、詰らなそうに良人を見た。彼女はアキラ[E]めきれない風でつけ足した。

「私の云った要点とまるで違ってよ、それは」

「だって彼奴の性格はそうだよ。事実だから仕様がない」

さよは黙り込んだ。彼女は何ともいえない物足りなさと淋(さび)しさとを感じた。せっかく一心に矢を射(ひ)いても、いざというところで的がくらりと斜(はす)かいになり、徒(いたずら)に流れ矢となって落ちてしまう。さよは、せめてかっちり、要点だけは受けとめて欲しかった。返事は間違ってもよいから「お前のことだからこうでも思っただろう」というところから発足しなければ、焦点が合わない[4]

ということ位、鋭く感じて欲しかった。

「この空虚な喰い違いを、何とも感じないのだろうか！」さよは、心の裏に寒さを覚えながら、愕き慍って良人の顔を見なおした。

最初は、相当愛嬌をもって始められた当てっこ、さよの云う心の跋渉は、時が経つにつれ、次第に感情の複雑さを増した。同時に、[5]幾分残酷なものにもなって来た。彼女は、これ迄、好い人というぼんやりした一つの型にはめて安心していた良人の性格を、自然細かに調べる機会を与えられた。そして、親達が、配偶として第一の条件のように云って聞かせてくれた好い人というものが、決して性格として頼れる面白いものでもなければ、まして自分が描いているように、潑溂と熱意ある生活の幸福などは、到底期待出来そうもなく思われ出したのであった。

さよは、当てっこの奥に暗く凄い何かが③募って来るのを感じた。彼女は、何気なく夕飯後、夕刊を見ている良人に云いかける。

「今日沢口の伯母様がいらっしゃってよ」

「ほう。何だって？」

「また幸雄さんのことをこぼしていらしったわ。あの人にも困るって。先達っての話は、自分から行って断ったのですって……」

さよは、注意深く保夫の返事を待った。幸雄は従弟で、彼はその兄役をしていた。

「贅沢だな。この就職難のとき自分からいいくちを断るなんて……」

保夫が、自分の予期通りのことを、呑気に云うのを見ると、さよは焦立たしさと悲しさとを同時に感じた。彼女は、複雑に、意地悪く動く自分の心持を、④惨めに自覚しながら云った。

[6]「伯母様に申上て置いたわ。今度幸雄さんがいらっしゃったら、きッと保夫がよくお話しするでしょうって。——そうでしょう？　貴方幸雄さんに、伯母さんを早く安心させるもんだよっておっしゃるでしょう？」

保夫は、機械的に答えた。

「云わなくちゃあなるまい。――せっかく理財科まで出て遊んでいるのももったいないからな」

さよは、「何故そんな上っ面で安心？　どうしてもう一皮、幸雄さんの心持の下まで切り下げないで安心なのだろう！」という、歯痒い歯痒い心持を、やっと、

「幸雄さんはいい従兄を持って仕合わせね」

という皮肉に洩した。

けれども、保夫は、彼の傍で、さよが、どんな感情に煮え立ち、それをどんな心持で制しているかは、まるで感じないように見えた。彼は苦労も不安もないらしく、⑤艶の好い、型通り青年紳士の顔を、悠々居間の灯の下に浮上らせているのだ。――

7 彼女が指先に絡めて編んでいた絹糸のように、慎ましく輝き、滑らかであった生活は、少くともさよの心の内で変化した。彼女は、良人と自分との調和ある沈黙の頷き合いは、散歩に出ようか出まいかということ、二人共が丁度同じ時番茶を飲みたいと思うこと等以外に、果してどこまで深く連絡があるかひどく疑わしい心持に、結婚後始めて逢着したのであった。

（宮本百合子「心の河」による）

問一　傍線部A～Eのカタカナを漢字に改めよ。

問二　傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで記せ。

問三　傍線部1「そこから二重の嬉しさを得たのである」とあるが

（a）「そこ」とはどのようなことを指しているか、答えよ。

（b）「二重の嬉しさ」とは何か、説明せよ。

問四　傍線部2「何の稽古が始るのかい」とあるが、「何の稽古」という表現に込められている保夫の気持ちを説明せよ。

問五　傍線部3「酸いような笑い」とあるが、ここにはさよのどのような気持ちが表れているか、説明せよ。

問六　傍線部4について、この表現から、さよが自分と夫とのやりとりをどのようにとらえていると読み取れるか、説明せよ。

問七　傍線部5「幾分残酷なものにもなって来た」とあるが、それはどういうことか、説明せよ。

問八　傍線部6について、この発言はどのような意図のもとに発せられたものか、詳しく説明せよ。

問九　傍線部7「彼女が指先に絡めて編んでいた絹糸のように、慎ましく輝き、滑らかであった生活は、少くともさよの心の内で変化した」とあるが、どのように変化したのか、説明せよ。

Ⅱ つぎの一節は、香道（香木を焚いて香りを鑑賞する道）を好む人が、見たこともない「黒き梅の花」を求めたことを記した文章である。これについて後の問に答えよ。

香をきくことを好める人、深くこの道にほれまどひて、愚かに思ひまどへるに、その友なりける人語りけるは、「『群芳譜』とふ書の中に、苦楝樹に梅を接げば、又の年必ず黒き花をひらくといへり。しかして見たき物にぞ」といふを聞き、何事もして見る癖なむ侍るうへに、欲りする心の深かりければ、これ、もし黒き花咲かば、市に出してこがねにかふべし、と心の中に深くよろこぼへど、その苦楝樹とふ木のA<u>おぼつかなくて</u>、所の物知りに問ひければ、「それは「あふち」の事なり」と申さす。「さる木はいづこに侍るや」と問へば、「玉水の里に多く侍りしとおぼえつ」と教ふるに、「しからば玉水には我がいとこの侍るに、今より参りてまづ一木接ぎて試み侍らむ」とて、にはかに足結しめて、巨椋堤を南ざまに走り、ただ一時といふに行き着きて、大汗をのごひてあるに、[1]<u>「何事にかゆくりなくおはしたる。</u>春日の御祭りにか」などいへば、「さることには参らず。御庭に苦楝樹や侍る。少し接ぎ穂して試みたき事の侍るに、梅の穂もて参れり」といふ。主思ひがけねば、「これは何事ぞ。①さるむつかしき名持たる木は侍らず。聞きたがへ給ひつらむ」といふに、「あまりに急ぎたりしかば、②物知りの教へたりし名はとく忘れたるなり。まことに苦楝樹にては侍らざりし」とて頭をひねれども思ひ出でず。

その日は遅くなりつれば、夜はやどりて、又の日の暁、人をしたててB<u>かの物知りのがり問ひ遣りければ</u>、「あふち」と書きて来つるに、「これなりし」とて、「「あふち」や持ちておはす」といへば、「さる木も侍らず」といふ。「御庭にあらずは、此所には多くある木なりと京の物知りののたまひつる、聞きてたべ」といへば、をちこち問ひ合はせて、「此所の物知りの申さすは、「あふち」は「栴檀」の事にて侍る。苦楝樹と申す名は聞きも及ばずと申さすなり。いかに違ひて聞き給へるならむ」といふ。これもかれもいとまぎらはしくなりて、C<u>しばしいさよひしが</u>、「さるにてもかく参りて侍るに、まづその「栴檀」にまれ、「あふち」と心得て接ぎてみむ。御庭にや侍る」といへば、「「栴檀」ならば、それらの木はみなそれにて侍る。いづれなりとも接ぎて見給へ」といふに、若木の一尺ばかりまはるを、木の本を伐らせて、もて行きし梅の穂をならひしままに接ぎて、「やがて黒き

梅の花を見せ参らせむ」とて、その日も其所にやどり、「この木のかたへには童べどもは避きてたべ」などいひ頼みて帰りしが、二十日ばかり過ぎて、[2]いかに侍らむ、見て来ばやと思ひて、珍らかなる物をつとにして、「先つ頃の礼も聞こえまほしくて、又くだりさむらふ」といふに、主のまづ聞こえ侍らむは、「[3]のたまひしごとく、人とてはかたへにも寄せず守りてさむらふに、はや十日ばかり先に、皆枯れて侍り。来む年の春、接ぎ直してみたまへ」といふに、力なく、「さるにてもその根の木をたべ」とて、自ら鋤もて行きて、太き根の所を挽き切りて、もて帰りて屋根にうち上げて干しおきたり。

さて後、うちかきてこれを焚くに、をかしき一ふしの香りしたりければ、[4]「梅が代」といふ名を付けて、[5]自ら讃へて持たりけりとなむ。

（建部綾足『折々草』による）

（注）○群芳譜――植物についての解説書。
○接げば――接ぎ木をすると。接ぎ木は、異なる植物の枝などをつなぎ合わせ、品種改良する方法。上につなぐ枝を「接ぎ穂」という。
○申さす――ここでは「申す」と同じ。　○玉水――京都府南部の地名。　○足結――袴の膝下をくくる紐。
○巨椋堤――巨椋池の堤の道。京から玉水への道中にある。
○春日の御祭り――奈良の春日神社の大祭。　○うちかきて――削り取って。

問一　傍線部A「おぼつかなくて」、B「かの物知りのがり」、C「しばしいさよひし」を現代語訳せよ。

問二　傍線部1「何事にかゆくりなくおはしたる」について、

（a）　現代語訳せよ。

（b）　どのような様子に対してこう言ったのか、説明せよ。

問三　波線部①「さるむつかしき名」、②「物知りの教へたりし名」はそれぞれ何を指すか、本文から抜き出して答えよ。

問四　傍線部2「いかに侍らむ、見て来ばやと思ひて、珍らかなる物をつとにして」について、言葉を補って現代語訳せよ。

問五　傍線部3について、「のたまひし」の内容を説明せよ。

問六　傍線部4について、なぜ「梅が代（しろ）」という名を付けたのか、事の経緯を明らかにして説明せよ。

問七　傍線部5「自ら讃へて持たりけり」には、この人のどのようなさまが表れているか、冒頭の二重傍線部を踏まえて説明せよ。

Ⅲ

つぎの文章について後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送りがなを省いた箇所がある。

賢主ノ言笑顰呻、足以移風俗。慶暦中、広州ニ有リ番商ノ没官ノ珍珠。仁宗与ニ後宮ニ同ニ閲、愛ニ其ノ珠ヲ。是ノ時張貴妃在レ側ニ、有ニ欲スルノ得レ之ヲ色一。上依リテ所ノ估ル値ニ、出シテ禁中ノ銭ヲ買ヒテ之ヲ以テ賜フ。時ニ因リテ同列ニ有リ求ムルニ於上ニ、有司被リテ旨ヲ和市ス。縁リテ此ニ珠価騰湧ス。上頗ル知レ之ヲ。一日、於イテ内殿ニ賞ス牡丹ヲ。貴妃最後ニ至リ、以テ所ノ賜ル珍珠ヲ為シ首飾ト、欲スレ誇ラント同輩ニ。上望見シ、以テ袖ヲ掩ヒテ面ヲ曰ク、「満頭白紛紛ナルニ、更ニ没シトニ些サカノ忌諱モ」。貴妃慚ハヂテ赧アカラメ、遽チテ起フレ易ヲ之。上乃チ大イニ悦ビ、令ニ人ノ各オノオノ簪ニ牡丹一朶ヲ。自是禁中不レ帯ビニ珍珠ヲ、珠価大イニ減ズ。

（宋・馬永卿『元城語録』による）

（注）○言笑顰呻――愛好したり嫌悪したりする態度。　○風俗――社会の気風、風潮。　○慶暦――北宋の仁宗朝の年号。
○番商――南方の外国の商人。　○没官――官による財産の没収。　○有司――官員。
○和市――官と民の間の取引。ここでは官が買い上げること。　○首飾――髪飾り。　○満頭白紛紛――白髪頭のたとえ。
○赧――赤面すること。

問一　二重傍線部a～cの文中での読みを、ひらがなのみを用いて示せ。

問二　傍線部1を、ひらがなのみを用いて書き下せ。

問三　傍線部2について、「之」の内容を明示して現代語訳せよ。

問四　傍線部3について、張貴妃が最後に至った意図を説明せよ。

問五　傍線部4について、誰が、誰にどのようにさせたのか、具体的に説明せよ。

問六　波線部A・Bについて、それぞれこのようになった原因を、冒頭の文の「賢主言笑顰呻、足以移風俗」を踏まえて、説明せよ。